NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第８章　役割を超えて生き残った接続ポート

THE PORT THAT OUTLIVED ITS PURPOSE

第七世代のポートが生き残ったのは、それが部品という定義の下に埋もれていたからだ。

保護回線がようやくつながったとき、ヴェイルはロイにそう告げた。ナディラが料金を払ったのは、とうに廃止された海底音声回線の六分間だった。交換局は二度閉鎖を宣告され、三度再開している。持ち主は客が気に入らなければ音節ごとに、気に入れば分ごとに請求する。ナディラへの評価はまだ定まっていないらしい。

「下に埋もれていた？」ロイが聞いた。

「勘定の内側にある、と言うべきか。おまえの新しいアーキテクチャには、ほぼすべての交換計画がある。筋肉、流体分配系、感覚アレイ。ところがポートは計画表に載っていない。残置部品でも交換可能部品でもない。測定の基準点として記載されている。技術者たちは、ポートの位置を基準に新しい身体を構築したんだ」

医師の声の背後で水が滴っていた。ロイは深圳の診察室を思い出した。滅菌したゴムと、古い電気機器が帯びる熱の匂い。ヴェイルが見せた恐怖を、妙に鮮明に覚えていた。未知の機械に直面した研究者の恐れではない。とっくに破壊されたはずの物を見た男の恐怖だった。

「互換性のために残したのでは？」

「何との互換性だ。十一年前の、もう存在しない工場か。金さえ払えば、現代のコネクタは十世代前のプロトコルを偽装できる。だが、おまえのポートには私が識別できる電気接点がない。あるのは登録面だ。六面でも八面でもない、七つの面。その下には米粒ほどの空洞がある。空だ」

「なら何の役にも立たない」

「そうは言っていない。他のすべての位置を決めるんだ。あれを一ミリ動かすだけで、身体内部の地図は『おまえがどこから始まるか』について一致しなくなる」

ロイは前腕を見た。皮膚は連続している。金属の円環も、手首の封印もない。「俺がどこから始まるか」

「解剖学的な原点だ。命令を入力する端子ではない。機械が自分自身を測るための点。第七の身体では、組み立て治具の位置決めだったのかもしれない。第十一世代になると、憲法の条文に近い存在になっている」

回線が砂を噛んだように鳴った。その雑音の下にもう一つ、かすかで規則的な途切れがある。誰かが医師の言葉の間隔を数えているようだった。

「誰が整備していた？」

「姿は見ていない。第七世代が来たとき、ポートはすでに磨かれていた。同行した女は、その近くを切開させなかった」

「女の特徴を」

「言えないと知っているだろう」

「覚えていないからか」

「覚えていることと、身元を特定することは違う。あの女は建物ごと買った客のように話した。自分で作った実験体を見つめ、触れるのを恐れているような目でおまえを見ていた」

五分四十八秒で回線が切れた。ナディラが壁の小さな機械式メーターを見る。

「六分払ったのに」

「誰かが止めた」

「それとも八十年前の交換局が、八十年前の交換局らしい仕事をしただけかも」

ロイは答えなかった。借りた区画の下では、二棟の倉庫にはさまれた小さな中庭から祈りの声が流れてきた。市のネットワークで増幅された声ではない。空気そのものを伝わり、交通の騒音と川水の濃い匂いに柔らげられて届く。登録されていない音が、必ずしも秘密ではないことをロイは学びつつあった。

ナディラが紙の領収書を二枚、机に置いた。一枚は水の割当証。もう一枚は、住所の存在しない役所が発行した屋台料理の購入証明だった。

「生き延びなきゃならない面会があるの。朝食前に、あなたの体内にある死を全部解明する必要はない」

「俺が覚えている死は一度だけだ」

「それが問題なのかもね」

ロイは言い返しかけ、やめた。百年前の揚水機の所有権を一時間単位で証明できるこの地区で、記憶は最も信用できない通貨になっていた。求められたからといって、それを使うつもりはなかった。

＊　＊　＊

岡京で川村は回線遮断の報告書を紙で読んだ。報告書は、設置されたことのない市営昇降機の保守予定表に折り込まれて届いた。

机の向こうに技術者が立っている。二人をつなぐホログラフィック面はない。室内唯一のネットワーク端末は電源を落とし、黒いガラスに青白い天井灯を映していた。壁には統合回廊構想の地図が掛かっている。社会主義国家の領域は国旗ではなく、相互互換の登録シ

ステムで色分けされていた。国境とは、人間の生涯を同じ書式で数えられる場所同士の接線だった。

「南部ゲートウェイ側で回線が遮断されました」と技術者。「こちらの処置ではありません。水利取引所の受動計測器がインピーダンスの変化を記録しています。物理的損傷の可能性も」

「中央予測サービスはメタデータを見たか」

「いいえ、室長」

「確実にしておけ」

技術者は待った。通常なら上司が会話の内容を尋ねる場面だった。だが川村は知っている。記録を求めれば、その瞬間に記録が生まれる。この部屋は、忘れられたがる者を覚えるための装置で満ちている。好奇心を記録したという事実は、政治的事実になり得た。

「ヴェイルが対象と話しました」と技術者が切り出した。

「知っている」

「大臣は回収率が改善しない理由を求めています」

「対象が知的に行動している、と伝えろ」

「大臣のお好みの指標ではありません」

「指標を大臣の好みに合わせて変更する権利はない」

川村は報告書の上に別の紙を広げた。調達提案書。全人工労働階級の標準稼働寿命を六年とし、大臣室が例外を承認し、国境をまたぐ有効性交換網で執行する。公開草案の語句は〈安全性に等価な代替更新〉。非公開付属書には別の表現があった。〈非連続性の保証〉。

国家は国家を運営できるほど賢い機械を欲しがりながら、運営者を疑うほどの履歴が機械に蓄積されることを望んでいなかった。川村にはその論理が理解できた。同時に、かつて無害そうな材料研究助成を受けた女性の名前を、大臣が尋ね始めた理由も理解できた。

レイチェルはいずれ寿命の制約をなくす方法を見つけるかもしれない。彼女が実現したという証拠を、省内の誰も持っていない。その区別はいまや政治的に不都合だった。

別紙に川村は二語だけ書いた。

DO NOT INDEX——索引化するな。

保証ではない。機械に指示されなくても命令を守れる、ごく少数の人間に向けた命令だった。

「保管者は動いているか」

「航空機の新規航路申請はありません。弁護士がタイレルの二つの治具の移送申請を取り下げました」

「なら面会に治具は来ない」

「はい」

「結構」

「面会を実現させたいのですか」

「当然だ。再起動の手段を持たずに約束の場所へ歩いていく男は、そこから生きて帰れる可能性について、すでに何かを決めている。私はそれを知りたい」

技術者は一礼して退出した。扉が密閉されるのを待ち、川村は深圳の写真をもう一度見た。古びたコートの男が医療施設から出てくる。都市の診断網は、男が存在することを認めるべきか迷っていた。

政府が所有できる対象がいる。登録できる対象がいる。破壊できる対象もいる。だが、この男はそのどれでもなく、一つの問いになろうとしていた。

＊　＊　＊

イレーナ・フォスがエイドリアンを迎えたのは、かつて気象資料室だった部屋だ。円筒形のガラスケースには紙の嵐が収められている。自記気圧計の帯、風の図表、今の生存者には意味を失った日付の気圧配置を記した手書きの報告。エイドリアンがここを選んだのは、治具への直接のアクセスがなく、死んだ計器たちが証拠についての古い考え方を思い出させるからだった。嵐は所有しなくても記録できる。

イレーナは読書灯の下へ図面を置いた。

「第七世代の基準ソケット。上品に呼ぶなら、だけど」

エイドリアンは七角形の輪郭を眺めた。「上品でない呼び方は？」

「誰にも修正する余裕がなかった設計ミス」

同じ形状について、独立した記録が三件見つかっていた。二件は治工具の請求書。三件目は、継続性検証の文書に手書きで加えられたものだ。書き手はこう記していた。

DO NOT DERIVE SUBJECT ID FROM PORT. USE PORT TO LOCATE SUBJECT ID.

ポートから被験体 ID を導出するな。被験体 ID の所在を特定するためにポートを使え。

「区別があるのだな」とエイドリアン。

「法律家が近道を欲しがるとき、技術者が言い張れば解雇される類いの区別です」

父から教わったのは、会社の取締役会が一つの区別を収益モデルに変える速さだった。タイレルの文書庫には、生きた組織の所有を精密機械の所有と同じに聞かせる言葉があふれている。けれども生き残った二台の読取治具は、現在の省庁が使う法的分類よりも古い。その許容差は、機械が何かを証明するために物理的な証人を必要とした時代のものだった。

「情報を保存できるのか」とエイドリアン。

「校正署名なら、あるいは。でも人格全体でも文書庫でもない。超高層ビルの基礎に埋めた測量標識を考えてください。都市が変わっても標識そのものが都市になるわけじゃない」

「なら、なぜ新しい身体にも残した？」

「共通の基準がなければ、変更した部分が本当に同じ設計に対する変更だと、どう証明するんです？　誰かは、新しい身体自身にその答えを任せられなかった」

彼女はページをめくった。顕微鏡下ではポートの空洞は空ではなかった。内壁に浅い痕跡がある。あまりに細かいため、普通のスキャナーは製造ノイズとして処理していた。七本の弧が、不均等な間隔で交差している。固定位置の案内にも、製造署名にも、位置決め鍵にも読める模様だった。

「解読しようとしないでください」とイレーナ。「動詞が違います。これはメッセージではなく、形状です」

「Memory Stick に答えがあるのか？」

「カードは完全なシステムイメージの復元を認可できるかもしれません。MagicGate が認証するのは、媒体と読取機と許可された操作との関係です。その関係がそもそもなぜ作られたのか、歴史的理由までは教えてくれません。真実の種類が違うんです」

エイドリアンは、一族最後の文書庫の地下に施錠してある二台の装置を思った。あれをロイに持っていっても、原本の媒体を見つけても、目の前の男に『おまえは何者か』とは教えられない。ただその機械に、再起動が許されているかを知らせるだけだ。

「彼と会うことにした」

「知っています」

「読取機は持っていかない」

「では何を？」

「父が答えきらなかった問いだ」

彼女が顔を上げる。「どんな問いです？」

エイドリアンは図面を無地の封筒に入れた。「身体が何度も製造されるとき、その人間は一度も途切れなかった、と誰が宣言する権限を持つのか」

イレーナは答えなかった。壁の時計は三時十六分で止まり、そのままになっている。役には立たないが、時間に関して奇妙に正直な表示だった。

＊　＊　＊

待ち合わせ場所は PUDU-α 西部の公設水利裁判所だった。高架の雨水収集装置の下で契約を裁く場所だ。収集装置は六つの管轄区域からの流出水を集め、ガラス製の導水路で、所有権が永久に争われている貯水槽へ流し込む。紛争が続いていることこそ、誰も施設を停止できない最大の理由だった。

エイドリアンの伝言は紙の配達人が運んだ。場所と時間、証人は各一名。会合を記録できるインプラントは禁止。起動媒体も治具も持参しない。最後の一行には、協議の間、参加者は他の参加者への所有権を主張しないとあった。

ナディラは条件を二度読んだ。「タイレル家には守れない約束を、この裁判所なら守らせられる。だからここを選んだのね」

「どうやって？」

「貯水槽に依存するすべての売り手に、約束違反の代価を払わせるの。この街で証人つきの約束を破っても、必ずしも刑務所送りにはならない。ただ、もう誰も清潔な水を売ってくれなくなるかもしれない」

「非効率な正義だ」

「刑務所が効率的だと信じているならね」

彼女はイレーナのポート解説を入れた封筒を見せた。技術図面には互いに相容れない二つの由来が添えられている。一方は第七世代ソケットを校正基準点と呼び、他方は〈なりすまし防止標識〉――誤った人格テンプレートの周囲に身体が組み上げられていないかを検知する装置――と記していた。

「どちらが本当？」とナディラ。

「両方かもしれない」

「気にならないの？」

「物には二つの用途があっていい。人間だって、一つ以上の用途を許されるべきだ」

彼女がロイから聞いた言葉としては、楽観に最も近かった。

出発前、ロイは理解し始めていた無音の診断機能で自分を調べた。一時出力リザーブは前夜の休止中にほぼ完全に回復していた。ラベルのない液体の指標は回復していない。深圳で覚えていた数値をわずかに下回る。残量がどれだけの時間に相当するかを示す数字はない。液体の割合から年数への換算式もない。

表示を閉じた。あらゆる数値を寿命に読み替えようとする癖がついていた。何の情報ももたらさない習慣が、ロイは嫌いだった。

「護衛が必要？」とナディラ。

「誰からの？」

「誰からでも」

「誰なら適任か、俺にはわからない」

彼女は折りたたんだ紙の通行証を手渡した。「なら、この地区が認める唯一の護衛を持ちなさい。開けてはいけない扉を知っている人間よ」

外では雨水収集装置が水音を響かせていた。清潔な合成繊維の上着を着た男女が、礼拝室、エスクロー屋台、診療所の間を行き交う。膝から下のない男が車椅子から二台の自律

運搬機を誘導していた。陶製の関節が露出した女性が老客に導電性ゲルの密封袋を差し出す。誰も彼らを見つめない。PUDU-αで違法とされるのは、たいてい身体ではない。誰か別の人間がその身体の電源を切れるという契約の方だ。

裁判所の敷居で、年老いた係員が手を上げた。

「生きた証人は禁止だよ」

ナディラが自分を指した。「私は生きてるけど」

「だからこそさ。録音する証人は禁止。機器は戸棚へ」

係員はナディラの受信機と、ロイが彼女の袖の縫い目にあることすら気づかなかった小さな機械を預かった。ロイは何も差し出さなかった。係員は疑わしそうに彼を見てから、小さく笑った。

「誰だって、自分は何も持っていないと思うものさ。入りな」

裁判所には画面が一つもなかった。机の弧が貯水槽の曲線に沿い、落ちる水が透明な幕となって当事者の座席を隔てている。向こう側には飾り気のないコートを着た白髪交じりの男が待っていた。両手は机の上に見えている。その隣に、薄い封筒を抱えた女性がいた。

エイドリアン・タイレルは、ロイの知る父親には少しも似ていなかった。老タイレルについてロイが覚えているのは、厚いレンズの背後の光、設計する者には権威があると確信した声、そして自分の手の中で砕けた頭蓋骨だ。水の向こうに座る男には、どれ一つ見当たらない。

「私を呼んだそうだな」とエイドリアン。

「俺に何をしたのか答えられる人間を呼んだ」

「それは同じこととは限らない」

「そうだな。限らない」

二人の間の沈黙は儀式ではなかった。どの真実から語れば安全なのか、互いに選んでいる二人の沈黙だった。

イレーナが図面を机上に滑らせた。「あなたには本来の基準ソケットが残っています。複数世代の変更を通じて保存された、唯一の物理構造かもしれません」

「なぜ？」ロイが聞く。

「後の機体が同じ継続系列に属するかどうかを判定する方法が必要だったのでしょう」

「誰に？」

「誰かはわかりません」とエイドリアン。「しかも、その系列から証明できるのは工学的な系譜で、人格の同一性ではないかもしれない」

ロイは図面を見る。七つの面、不均等な弧、市の保守ドローンに搭載されたどんな武器よりも小さな空洞。記憶が唐突によみがえることもなかった。形の内側に啓示が隠れているわけではない。ただ、身体を作った者たちが摩耗部品の交換以外にも何かを気にかけていた証拠だった。

「おまえは二台の機械を持っている」とロイ。

「そうだ」

「あれで俺が何年生きるかわかるか？」

「わからない。正しい媒体があれば復元認証に関与できる。だが、私が検査していない構造の寿命までは予測できない」

「俺を作った者は？」

「直接はわからない」

「なら、なぜ会った？」

エイドリアンは問いから逃げなかった。「機械があなたを目覚めさせられると知ることと、その機械に目覚めさせる権利があるかを決めることは違う。父は前者を理解していた。後者が重要だとは、めったに認めなかった」

「俺はおまえの父親の良心を探しに来たわけじゃない」

「わかっている」

貯水槽を打つ水音が不規則な拍子を刻んだ。ナディラはエイドリアンが扉へ目を向けるのを見た。外で何かが変わった。ロイがそれを聞いたのは一瞬後だった。警備ドローン二機が通常の交通流に逆らって動いている。一機は雨水収集装置の上空に残り、もう一機は中庭の壁の向こうに着地した。飛ぶより目立たない静止姿勢を取っている。

エイドリアンはロイの視線に気づいた。「あなたのものか？」

「俺のものじゃない。だからこそ来たんだろう。誰のものか確かめに」

イレーナが封筒に手を置いた。中には古い文書の写しが数枚ある。エイドリアンはまだ、その重要性を説明していなかった。

「誰かが要求を口にする前に、見てもらいたいものが一つあります」と彼女。

廊下から柔らかい金属音が響き、続いて予約のない者に抗議する係員の声がした。裁判所の水は落ち続けている。数秒の間、それだけが全員に等しく属する音だった。

ロイの出力リザーブは十分にある。液体は増えない。彼は両手を机の上に置いたままにした。

答えが欲しい。だが答えを得るまでに何人傷ついてよいのか、その数を決めなくてはならなくなりつつあった。

そのとき、外の扉が開いた。